東アジアの「1968」という時空間とその文化表象
——日本の全共闘運動と台湾の保釣運動を中心に

張政傑

【博士論文の要約】

1960年代後半は、「世界革命」と呼ばれるほど世界中の若者が相次いで蜂起した激しい時代である。それはフランスの五月革命やアメリカの公民権運動、ベトナム戦争反対運動など、先進国の「同時多発的現象」とされており、1968年にそのピークを迎えた。そのなかで後発先進国である日本の全共闘運動という学生運動は、同時代のアジア、アフリカ、欧米などでの社会運動の高揚と強く共振し、一般的にはグローバル・シックスティーズ（the global sixties）というカテゴリーに位置付けられている。

本論文が分析の対象としているのは、このグローバル・シックスティーズ（the global sixties）というカテゴリーに組み入れられた日本と台湾の作家と作品である。近年、活発に展開している世界史（global history）の一領域であるグローバル・シックスティーズ論＝「1968」論では、研究の焦点が欧米から第三世界、特にアジアへ移る傾向が顕著である。本論文は、日本の「1968」に関連する研究では看過されてきた文化的側面とトランスナショナルな側面に注目し、東アジアにおける日本と台湾の地政学的関係をふまえ、作品の類型とスタイルにより世代論と記憶論、映画論を援用しながら同時代の日本と台湾の学生運動に関連する作品の比較研究を行う。そしてそれによって、文学・文化研究の立場から東アジアの「1968」を論じる際の新たなパースペクティブを提示することを目的としている。

(1) グローバルな1960年代 (global sixties)に関する研究においては、いかに当時の日本のによる様々な抵抗運動を位置付けるか、どのように文学作品でその運動が語られてきたか、既成体制に対する若者の叛乱の諸像を語る際に戦後日本の文学表現およびそれに隣接した音楽、演劇、映画などの諸文化領域にどのような変容が引き起こされたのかといった一連の問題系について、今までの政治学や歴史学、社会学からの研究では見逃されてきた日本「1968」の複雑かつ錯綜した文化的状況と思想的変化を解き明かす。

(2) 1971年に台湾国内の大学生と海外の台湾人留学生によって起こされた台湾の保釣運動（釣魚台/尖閣諸島を守る運動）を比較軸に据え、日台間の領土問題で爆発した学生運動を描く文学作品の読解を中心に、歴史的コンテクストと文学的表象の間に現れた亀裂に注目しながら、「冷戦」というイデオロギーがそれぞれの特殊な社会状況と歴史条件の中でいかにローカル化したか、それに急進的な手段で抵抗して失敗した各々の若者がいかに自らの言いがたい過去を文学・映像で表現したか、その文化的実践が21世紀の現在に与えた影響は何なのかといった問いについて東アジアの「1968」を再考し、そのグローバルな意義を明らかにする。

東アジアの冷戦構造において「爆発」のように誕生した「1968」と「その後」を理解するには、米ソ対立、冷戦構造は、東アジアの地政学的な関係を形成したのかについ

て再考する必要がある。また、同じ冷戦構造においても、各地域の政治的、歴史的、文化的な状況により、異なる「1968」が生成するはずだ。異なる「1968」を比較する際、有効な比較フレームワークの構築は不可欠なプロセスである。そのため、本論文は、まず東アジアの冷戦構造について冷戦研究を整理してみた。しかも、政治体制や外交関係のみならず、文化の領域まで浸透していた「冷戦的感性」の存在を指摘した。

また、ハリー・ハルトゥーニアン（Harry D. Harootunian）の「時空間」に関する論考を援用しながら、「1968」の内包する異なる時間性と、「1968」の文化表象にしばしば現れる時間と空間の混乱と交錯から、「1968」を「異なる時空間の同時共存」としての意味を明らかにし、空間においても時間においても越境的なアプローチにつながるヒントを獲得した。以上のフレームワーク構築から、ガヤトリ・スピヴァク（Gayatri C. Spivak）のいう「言語の等価性」に着目して「1968」の比較方法を模索した。そこで「1968」とその文化表象におけるダブルバインドによって新たな比較分析のヒントが得られた。

以上のように、研究方法と比較フレームワークの構築を踏まえ、本論文は、以下の8章から構成されている。第1部は、表象される日本「1968」について論じる。日本「1968」では、小説、マンガ、映画などを通じて1970年代後半からどのような文化表象が形成されたのか、それがいかに形成されたのかについて通時的に考察する。第2部は東アジアと「1968」について論じる。視野を日本から沖縄、台湾にまで拡大し、日本、沖縄、台湾の比較研究を通じて東アジアの「1968」の特性を考察する。

第1章では、全共闘とその無惨な敗北を理解しようとする日本社会の強い欲望と「全共闘」を語る難しさという観点から、1977年の芥川賞の受賞作となった三田誠広の「僕って何」と高城修三の「闇を抱いて戦士たちよ」を中心に、1970年代後半において全共闘がいかに描かれたのかを解明した。そして「視界」（horizon）という世代論の概念から「全共闘世代」の可能性と有効性について考察した。

第2章においては、基地のある故郷佐世保を舞台にした村上龍の小説「69」を分析対象として分析した。村上龍が自分の実体験に基づいて書いた「69」という小説では、当時の若者がロックや演劇、前衛映画を通して感じていた身体的な解放感が生き生きと描かれている。本章は、
1960年代後半の音楽、特にロックの歴史をふまえてそれがいかに当時の若者の共感を得たのか、そしていかに体制に抵抗する象徴になったのかについて検討した。また、戦前は軍港であり、戦後は米軍基地となった佐世保という特殊な空間が「69」においていかに日本の「戦後」として表象され、「日常」として描かれるのかを解明する。

第3章は映像によって表象された「1968」について考察した。1960年代末にピークに達した若者の叛乱は、連合赤軍による「あさま山荘事件」という衝撃的な事件以降、その運動が失速したと言える。その後、その事件を素材として描く三田誠広の『漂流記1972』と桐山襲の『スターバト・マーテル』が登場する。本章は、この両作の比較も含めて九〇年代以降に、マンガ（弘兼憲史の「島耕作シリーズ」や山本直樹の『レッド』）や映画（『突入せよ！あさま山荘事件』と若松孝二の『実録・連合赤軍　あさま山荘への道程』）によって創られた連合赤軍事件の表象形成を検証しながら、大衆の消費の欲望の下で「1968」の表象がいかに変化したかにについて究明した。そして中平卓馬の風景論とドゥルーズの映画論を援用しながら、若松孝二の『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程』における幻視者の潜在的な力を論じた。

第4章は、桐山襲の「風のクロニクル」を分析した。大学キャンパスを舞台に当時の若者の心理状況を描いた初期の三田誠広や立松和平に比して、桐山襲は過去と現在の断裂を問題視している。桐山襲の小説に反映された時代の断裂とはどのようなものであったのか。本章は、東アジアの冷戦構造の形成とイデオロギー性を考察し、通信文と戯曲と情景の交錯によって構成される「風のクロニクル」、あるいは桐山のデビュー作「パルチザン伝説」における重層的な時間構造とそれによって隠蔽された過去と現在の断裂を明らかにした。また、作品における異様な身体性と文体との関係から、本作品を、新たな言語の創造を通じて、そして呼びかけと応答の連続プロセスによって創られた「開放的記憶装置」として読解する可能性を提示した。

第5章は、沖縄の「1968」に言及する桐山襲の「聖なる夜　聖なる穴」を考察した。1960年代後半の沖縄における復帰運動と反復帰運動には日本本土の反戦運動との連帯がある。なぜなら、戦争を遂行する行動主体のアメリカ軍は沖縄の基地に大量に駐在しているからである。そうであれば、桐山襲がいくつかの作品に沖縄の要素を入れていることは偶然ではないだろう。返還前の沖縄で桐山の感じた「非国家」的な雰囲気、開放感、つまり「天皇」主権国家に対しての拒否は、「1968」の思想と強く共振していると言える。本章は、桐山の「風のクロニクル」と「聖なる夜　聖なる穴」を中心に、作中における複数の時空間の共存に注目し、モダニティとコロニアリズムの混合体としての日本に直面するオキナワがいかに日本の「1968」と接続されたかについて考察する。また、作中における従軍慰安婦の描写に見られる骨の想像力と水の想像力の同時発動に注目し、近代以降、琉球が日本領土に編入され沖縄になり、そして「1968」という時代を通過したことで再びオキナワへと変身する過程を解明し、「現在」を変える潜在的可能性を論じてみる。

第6章は、日本の桐山襲と台湾の劉大任を中心に日本「1968」と台湾「1968」の比較研究を行った。1960年代の台湾はまだ戒厳時期であり、社会運動や学生運動は言うまでもなく、団体を結成する自由さえもなかったため日本の全共闘運動のような大規模な学生運動の発生する可能性は低かった。しかしながら、1970年に台湾、欧米各地において爆発した「保釣運動」という尖閣諸島／釣魚台を守る学生運動は、白色テロ以降の運動タブーを破った。反帝国、反体制の色彩を帯びる「保釣運動」は異なる思想や勢力の集合体であり、1970年代以降の台湾の本土化と文化・芸術の革新とも深く関わっている。本章は、アメリカ西海岸の「保釣運動」の指導者の一人である劉大任の「浮游群落」と「遠方有風雷」という二つの小説をめぐって、「保釣運動」前の台湾社会がいかに表象されるか、「遠方有風雷」における「僕」と「僕の母親」と「僕の父親」という三人の視線を通して「保釣運動」がいかに語られるかについて考察する。また、桐山襲の作品にも見られる異なる時空間の共時性とダブルバインドに注目し、日本と台湾の「1968」の比較フレームワークを考案する。

第7章では、郭松棻という海外の保釣運動の中心人物を中心に考察した。大規模な学生運動が一時的に現れたとしても、戒厳令下の台湾では「保釣運動」は長続きしなかった。そのなかで、当時アメリカで比較文学を専攻する留学生でありモダニズム派の新鋭小説家であった郭松棻は、台湾での運動には参加できなかったが海外での活動をはじめた。思想の左傾化と行動の急進化の後、運動の挫折、中国の訪問などを経験し、ブラックリストに載せられて帰国できなくなった郭松棻は、ナショナリズムと社会運動に関する思索を深めながら、1980年代初頭から再び小説という形で表現活動を始めた。本章は、郭松棻の前期評論（1966-1974）と彼の代表的作品を中心に、「1968」の「その

後」の体現者としての彼の精神の軌跡を辿りながら、そのアイデンティティと思想の変遷について明らかにした。

第8章では、1965年に創刊された雑誌『劇場』とその同人たちを中心に考察した。戒厳令下の台湾人は、体制に抵抗する政治活動が一切できなかったため、文化や文学、芸術などの分野で自由に意見を表明する方法を模索するという屈折した道を選んだ。劉大任の小説にも登場した前衛映画に関する様々な雑誌は、現実に存在していた。それは欧米の哲学思想や文化、芸術の紹介を理念として、台湾の重要なリアリズム文学の小説家である陳映真や劉大任、有名な新鋭脚本家、監督である邱剛健、黄華成らによって、1965年に創刊された雑誌『劇場』である。創刊時の同人のほとんどは、当時の若い小説家、脚本家、詩人、写真家であった。本章は、雑誌『劇場』をモダニズムとリアリズムの結合体として捉え、この雑誌が1970年代以降の台湾の本土化、芸術の革新運動にいかに影響したかについて、掲載された作品と上演された演劇をもとに考察を行った。

結論では、「1968」は、東アジアの冷戦構造への一つの「爆発」として政治のみならず、思想、文化、若しくは人間の日常生活を構成する感知性までに浸透してきたことを解明した。それは1980年代以降、「1968」の文化表象の消費化とともに、「冷戦的感性」は大衆文化の中で次第に自然化された結果、我々の日常生活の一部となり得た。ただし、「1968」を通過した際に「幻視者」となった人々は、少数であったがが、自然化された痕跡に気づき、自らの内部に潜んでいる何か、上手く既成の言語で形容し得ない何かを表現し得る新たな言語を模索している。その長い模索は、「1968」の「その後」を体現したと言える。